

有為な書写書道教員を養成するためのプログラム開発

— 事前事後指導の授業改善を踏まえて —

東京学芸大学附属高等学校	荒井一浩
東京学芸大学附属竹早中学校	清水文博
東京学芸大学	加藤泰弘
東京学芸大学	石井健
江東区立深川第六中学校	板垣純子

目 次

0. キーワード	58
1. はじめに —本研究の位置づけ—	58
2. 本研究の役割分担	58
3. 事前事後指導テキスト 「書道教員を目指す人へ—高等学校芸術科書道の教育実習を充実させるために—」の作成	58
4. 事前事後指導テキストを使用しての事前事後指導	61
5. 事前指導における授業観察の実施	62
6. 事前指導を振り返って —アンケート結果と分析を通して考える—	65
7. 教育実習で変わったこと —事後指導レポートから読み取る—	66
8. 事前事後テキストに対する学生の評価とその分析	67
9. おわりに —まとめにかえて—	68

有為な書写書道教員を養成するためのプログラム開発

— 事前事後指導の授業改善を踏まえて —

東京学芸大学附属高等学校	荒井 一 浩
東京学芸大学附属竹早中学校	清 水 文 博
東京学芸大学	加 藤 泰 弘
東京学芸大学	石 井 健
江東区立深川第六中学校	板 垣 純 子

0. キーワード

書写書道 教員養成 教育実習 事前事後指導

1. はじめに —本研究の位置づけ—

平成21年度のプロジェクト研究「有為な書写書道教員を養成するためのプログラム開発—教育実習と事前事後指導を中心として—」の研究成果として、以下のような改善すべき項目が指摘された。

- (1) 基礎実習の直前に配当されている事前事後指導では、より実践的な取り組みが必要ではないか。
- (2) 理論的な部分については、2年次までの書道科教育法で充実させておくことが大事ではないか。
- (3) 事前事後指導においては実践を通して理論を検証していく姿勢が有効ではないか。
- (4) 実践の感覚をつかむためにも早期の授業観察とより実践的な模擬授業が不可欠ではないか。
- (5) 実践的な学習指導案を作成する機会を多く持つことが必要ではないか。

本研究は、これらの改善を図ることを目途として進められた。基礎実習に重点を置くことは従前と変わらず、特にその基礎実習をいかに充実したものとすることができるかを、事前事後指導の改善を図ることで進めていくこととした。研究の重点をまとめると、以下の三点に集約される。

- (1) 事前事後指導での実践的な取組
- (2) 授業観察の実施
- (3) 実践的な学習指導案の作成

2. 本研究の役割分担

本研究は附属学校と大学、そして公立学校との共同研究として行った。研究の方向性と理論構築は大学の加藤、石井と事前事後指導を担当する荒井が行い、アンケートやレポートの分析と考察は清水、板垣と荒井が行った。全体調整とまとめは荒井が行っている。

3. 事前事後指導テキスト「書道教員を目指す人へ—高等学校芸術科書道の教育実習を充実させるために—」の作成

附属学校研究会書写・書道部会では、平成21年度のプロジェクト研究の成果を踏まえて、事前事後指導テキスト「書道教員を目指す人へ—高等学校芸術科書道の教育実習を充実させるために—」の作成を行った。テキストは、A4版34ページ、教育実習生を想定した20の質問に回答する形で、平易な解説を行い、資料として高等学校芸術科書道学習指導要領と学習指導案例を載せた。質問事項の選定については、平成21年度教育実習生に対するアンケート調査を参考とし、より実践的な項目となるよう心がけた。以下、その概略を紹介す

る。まず、目次である。

<目次>

【基礎編】

- Q01 教育実習の意義
- Q02 教育実習の目標
- Q03 学習指導要領
- Q04 授業
- Q05 基本的学習指導過程
- Q06 課題解決型学習

【応用編】

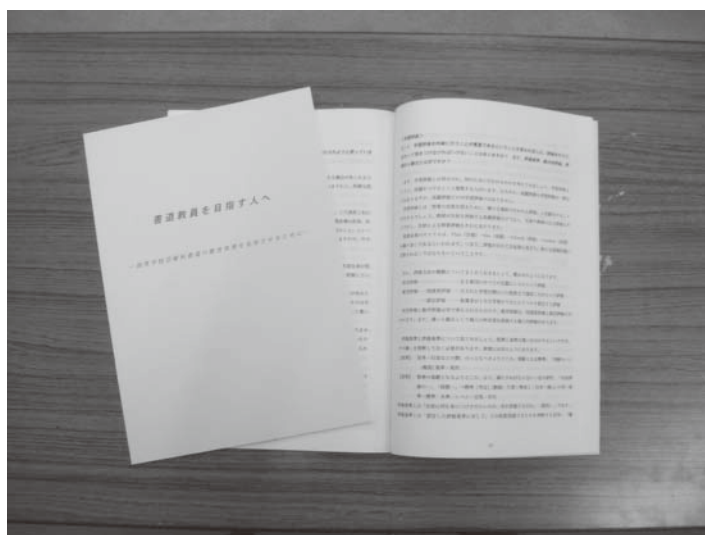
- Q07 授業形態
- Q08 教材
- Q09 教材研究
- Q10 板書
- Q11 発問
- Q12 机間指導
- Q13 学習評価
- Q14 指導と評価の一体化
- Q15 学習指導案

【実践編】

- Q16 緊張してしまう
- Q17 生徒が騒がしいとき
- Q18 指導案通りに進められるか
- Q19 質問されて分からないとき
- Q20 体調が思わしくないとき

【資料編】

- 資料 1 高等学校芸術科書道 学習指導要領（平成21年 3月 9日告示）
- 資料 2 学習指導案例



<書道教員を目指す人へ>

便宜上、【基礎編】、【応用編】、【実践編】に分けた。【基礎編】では、教科指導の基礎にあたる部分、どのような授業を構成していくにしても必ず踏まえておかななくてはならないであろうことを取り扱った。【実践編】では、実際に授業を構想するにあたって配慮しなくてはならない部分、つまり指導技術にあたる部分を取り扱った。【実践編】では、書写書道に特化したことではないが、実際の教育実習が終わった後に、教育実習生自身が困ったこととして実感を込めて記述したものから、重要と感じられるものを取り扱った。

巻頭言も引用しておく。少々長いですが、テキスト作成の意図を理解して頂けると思う。

この冊子は、高等学校芸術科書道の教員を目指す人、特に、初めて教壇に立つ教育実習生の皆さんのために書き下ろしました。

初めて多くの生徒の前に立ち、自分の力で授業を進めていかななくてはならないことに対する不安はとても大きいものがあるでしょう。

「実習期間が迫ってきているのに、具体的に何から取り組んだらよいのか分からない」「教材研究といっても、専門書を読むだけでよいのだろうか」「学習指導案の書き方が分からない」「人前で話すことが苦手だ」といったような悩みや不安はいくどとなく耳にしました。

経験を重ねた教師にとってはたわいもないことが、皆さんにとっては大事である場合も多々あります。教科に関する専門科目や教科教育法を学んできたにもかかわらず、教科指導の場で生かされていない光景を目の当たりにしてきました。

そこで、教育実習の事前学習として是非知っておいて欲しいことを、20の質問を設定し、それに答える形でまとめてみました。もちろん、教育に対する考え方は人により差異があるものですし、教師は日々、工夫改善に取り組んでいるわけですから、ここに書かれていることがすべてと言うことはありませんし、よりよい考え方もたくさんあるでしょう。

しかし、初めて教壇に立つ皆さんにとっては参考となることも多いと思います。表現もなるべく平易に書くことを心がけました。授業は、ある一定の型があるというものではありません。この冊子に書かれていることを参考として、自分自身の授業を創り上げ、充実した教育実習を送ってくれることを願っています。

次に、1項目だけ、内容を紹介します。他の項目も基本的には同様の構成を持って記述している（傍線及び囲み数字は新たに加えたもの）。

<板書>

Q10 今まで、黒板に文字を書いた経験があまりありません。普段の文字もあまり上手ではないし、生徒の前で書くことが不安です。また、板書をするときに注意しなくてはならないことはありますか？

①あまり経験のない人にとって、板書を効果的に書くことはなかなか難しいことです。

②まず、経験を積んで、黒板に書くことになれることが必要でしょう。普段の生活で、垂直面に文字を書くことはありません。硬毛に限らず、そのほとんどは水平面に、そして全体の紙面の大きさを把握しながら文字を書いています。しかし、黒板では腕を高く上げるという負担だけでなく、大きな黒板との関係を図りながら書き進めるのはある程度の慣れが必要です。また、チョークの執筆や黒板の堅さも慣れないと難しく感じるかもしれません。

③次に、板書計画をしっかり立てておくことが必要です。当然ながら、板書は学習活動の展開に合わせて書かれていくでしょう。明快な学習指導計画なしには、板書計画も立たないということです。これには、何を書くかというだけでなく、どのように書くかも含まれます。どのタイミングで書くのか（消すのか）、文字の大きさはどうするのか、チョークの色はどうするのか、書いているときの立ち位置はどうするのかまで考えておくことが必要です。

④そして、特に書道の授業では、教師が板書すること、板書したものが教材そのものになります。皆さんも教師の書く文字を見て影響を受けたことはありませんか。生徒は、教師の書く姿や書かれた文字をよく見ているものです。当然のことですが、筆順を間違えて書くなどはもってのほかです。書くりズムなど書き進める過程そのものが生徒に影響を与えます。配列・配置や行間の取り方も生徒にとっては教材なのです。毛筆は硬筆の基礎とか硬毛一体化指導という観点を踏まえれば、例えば「行書」を取り扱った授業なら、板書にも行書を取り入れて書くといった工夫があってもよいのではないのでしょうか。

⑤よい板書とは、書き上がった板書を見ると、何を学んだのかが一目瞭然とする板書であるとよく言われます。書道の授業ではそれほど多くの板書をするのではないかも知れませんが、まとめの段階で黒板を

見たときに、その時間に学んだポイントをすぐに振り返ることができる板書を心がけたいものです。

回答は、5段落で構成されているが、第1、2、3段落と第5段落は、一般的にいずれの教科目であっても注意すべき視点とすることができるだろう。しかし、第4段落は、書写書道の授業だからこそ大事ではないかと考えられる視点を意識して記述を行っている。つまり、板書が単なる知識の伝達や確認を進めるものという考え方だけにとどまらず、書写書道にとっては異なった視点を持って捉えることができることを示している。文字を書く過程や書かれた文字を観察することは、書写書道にとって日常の学習活動である。板書は書写書道にとって、教材そのものであるという視点を示すことで、授業のあり方が根本的に変化してくるのではなかろうか。「筆順」「書くリズム」「書き進める過程」「配列・配置」「行間」「書体」等、書写書道の用語と板書を結びつけることで授業でのふくらみを持った学習活動を展開することを意図したのである。

4. 事前事後指導テキストを使用しての事前事後指導

平成22年度のシラバスは以下の通りである。

	テーマ	内容	期日	担当
1	オリエンテーション	教育実習の意義と目標	4月15日	荒井 一浩
2	共通講義Ⅰ	学校教育の諸相	5月6日	センター教員
3	授業設計の基礎	学習指導要領を読む	5月13日	荒井
4		授業と基本的学習指導過程	5月20日	荒井
5		教材研究と授業研究	5月27日	荒井
		休 講	6月3日	
6		学習形態と教材（学習材）	6月10日	荒井
7		学習評価	6月17日	荒井
8		学習指導案作成の要諦	6月24日	荒井
* 附属学校での基礎実習オリエンテーション			6月25日（金）	
9	実践研究	模擬授業Ⅰ（中学校）	7月1日	荒井
10	共通講義Ⅱ	教育実習の心得	7月8日	センター教員
11	実践研究	模擬授業Ⅱ（高等学校）	7月15日	荒井
12		模擬授業Ⅲ（中学校）	7月22日	荒井
13		模擬授業Ⅳ（高等学校）	7月29日	荒井
* 附属学校での基礎実習			9月～10月・3週間	
14	研究課題の整理	基礎実習の報告と検討	10月20日	荒井

このシラバスだけを見ると、平成21年度から若干の変更を加えたに過ぎないが、事前事後指導テキストと関連づけて組み立てられていることがお分かりいただけるだろう。より実践的な取組を進めていくために、「授業設計の基礎」の段階では、新しい学習指導要領を現行の学習指導要領と比較・対照しながら読み進めるとともに、基本的授業過程を実際に芸術科書道用に書かれた学習指導案を参照しながら、かつ教室での生徒の動きを思い浮かべながら考察した。また、「板書」「発問」「机間指導」といった指導技術といったこと、そして実際の「自己評価」「相互評価」等の事例を紹介しながら、学習評価のあり方や指導と評価の一体化についても考える機会を持った。さらに、「実践研究」として、中学校及び高等学校での授業を想定した模擬授業を各2回、数名

のグループで検討を重ねたのち実施し、互いに評価しあい問題点の洗い出しとその解決策について考えた。

5. 事前指導における授業観察の実施

平成21年度の課題として、教育実習生が指導者の視点を持って授業観察をすることが不可欠である、それも事前指導を行って、授業のあり方を模索している段階での授業観察が有効であろうということでは言われてきたが、実際に教育実習生が観察できる授業を行うことはなかなかできないでいた。これには、大学と附属学校の距離が離れていること、お互いのスケジュールが合わないこと等が原因だが、平成22年度は、6月21日（月）に附属高等学校において公開授業研究会が開催されることに合わせて、教育実習生にも実際の授業を指導者の立場から観察する機会を持ってもらうことを計画した。当該時間は、大学書道分野での授業も入っていたのだが、附属高等学校において大学の授業の一貫として行うということにした。

附属高等学校における公開授業研究会は、特にテーマを設けずに、日常に行われている授業を公開し、教育関係者とともに研究協議等を行うというものである。既出のシラバスを見て頂ければ、この授業観察を行う時期が学習指導案について考え、模擬授業を計画していく直前に行われていたことが分かる。そして、同じ週の25日（金）には教育実習オリエンテーションも組まれており、重ねて教育実習と実際の授業を結びつけて考えることを行った。

以下、本時の学習指導計画だけの略案だが、学習指導案を掲出する。

芸術科書道学習指導案（略案）

日 時 平成22年6月21日（月）第5・6校時
対 象 第1学年AD組23名（男12女11）
授業者 東京学芸大学附属高等学校 荒井一浩
場 所 本館3階 書道教室

本時の学習指導計画

1 本時の目標

想いを込めることのできることば（漢字1字）を見つけ出し、意図に応じた表現を構想し、工夫をする。また、自己表現を高めるために資料を的確に選択し、それを生かして効果的に表現する。

2 本時の評価規準

ア 書への関心・意欲・態度	イ 書表現の構想と工夫	ウ 創造的な書表現の技能	エ 鑑賞の能力
書の創造的活動に関心をもち、主体的に表現や鑑賞の創造的な活動に取り組もうとしている。	毛筆の性能や機能、字形の特徴などの良さを感じ、感性を働かせながら、自らの意図に基づいて構想し、表現を工夫している。	創造的な書表現をするために、用具・用材や運筆のリズム、書風など書の効果的な表現の技能を身につけ、表している。	漢字の表意性などについて理解し、その意味を考え、表現された書のよさや美しさを味わうことができる。

3 本時の展開

	学習活動	学習指導上の留意点	教材	評価
導入 (10分)	挨拶をする 書道用具を調える 磨墨を始める 前時までの学習を振り返り、本時の学習との相違を考える	挨拶をする 過不足なく調べられているかどうか確認する 磨墨の注意点について確認する 前時までと学習の方向性に相違があることを示す	書道用具	学習に向かう姿勢ができているか (ア) 的確な磨墨ができているか (エ) 本時の学習に関心を抱いているか (ア)
展開 I (40分)	配布されたプリントに氏名を書き込む プリントの内容を目で追いつながりながら、書の二面性について考える 文字とことばについて考える 本時は文字という視点ではなく、ことばとしての表現を試みることを知る 漢字の表意性に気づく 一字書に取り組むことを知る 想いを込められることばを探す 自分自身を振り返り、ことばで表現できるか考える 自分の夢を思い浮かべ、ことばで表現できるか考える 導き出されたことばから本時で取り組むことばを選択する	本時のプリントを配布する プリントを読み上げながら、「模倣」と「創造」について考えるよう促す 文字とことばの関係について考えるよう促す 文字を表現することと、ことばを表現することの相違を理解するように働きかける 一字書の可能性について期待感を持たせるようにする ことばを選ぶことの大切さを理解するように働きかける 今までの自分自身の在り方を振り返り、ことばで表現できるかを考えるよう促す 自分の将来を思い描き、ことばで表現できるかどうかを考えるよう促す 想いを込めて表現するにふさわしいことばを選択するよう働きかける	書道概論7「書とはいって何を書くのか」	プリントの内容に関心を示しているか (ア) 「模倣」と「創造」について考えているか (イ) 文字とことばとの関係について考えているか (イ) 漢字の表意性やそれを表現することの意味を理解しているか (イ) 自分自身を見つめ、ことばを選ぶことの意味を考えているか (イ) 感性を働かせて表現することば選びができているか (イ)

	学習活動	学習指導上の留意点	教材	評価
展 開 I	<p>選択したことばをどのように表現したいかを考える</p> <p>そのための工夫を「筆」「墨」「字形」の視点から考える</p> <p>半紙を扱う方向について考える</p> <p>紙面に対する文字の大きさについて考える</p> <p>試書をする</p>	<p>イメージをふくらませ、表現の意図を明確に意識するように働きかける</p> <p>既習の学習事項から表現に生かすことのできる視点を見出すように働きかける</p> <p>用紙と表現との関係について考えるよう促す</p> <p>プリントに書き込んだことを意識しながら試書をするよう促す</p>		<p>自らの意図に基づいて構想することができているか (イ)</p> <p>用具・用材や字形の特徴などを工夫することができているか (イ)</p> <p>用紙と表現との関係について考えることができているか (イ)</p> <p>創造的な表現を試みることができているか (ウ)</p>
休 憩 (10分)				
展 開 II (40分)	<p>今一度工夫しようという視点を見直し、再度書く試書と見比べる</p> <p>自分自身での工夫はなかなか難しいことを知る</p> <p>古典を参考にするため字書を引く</p> <p>字書の扱いを理解する</p> <p>字書に示された字例から、表現の構想や工夫に応用できるものを探す</p> <p>トレーシングペーパーを用いて、字例を写し取る</p> <p>字例を参考としながら、意図に沿うように工夫を試みる</p> <p>工夫を繰り返し、意図する表現に近づくことを意識して取り組む</p>	<p>試書の繰り返しにならないように留意するよう働きかける</p> <p>試書と二枚目を比較することで自己の変容の困難さを理解するよう働きかける</p> <p>自己の表現を高めていくために何が必要か考えるように促す</p> <p>字書の基本的な構成とその引き方について理解するようにする</p> <p>主に楷書と行書の中から、自己の表現に何が生かすことができるのかを考えるよう働きかける</p> <p>丁寧に、筆順を意識して写し取るよう促す</p> <p>字例はあくまでも参考であり、自己の表現に生かしていくという視点を忘れないよう強調する</p> <p>同じ表現を繰り返すのではなく、意図した工夫が表現として表れるよう働きかける</p>	<p>書道字典</p> <p>トレーシングペーパー 鉛筆</p>	<p>創造的な表現を試みることができているか (ウ)</p> <p>表現の変容の困難さが理解できたか (エ)</p> <p>書道字典の扱い方を理解しているか (エ)</p> <p>字書の字例から自己の表現に何が生かせるかを考えることができる (エ)</p> <p>字例を写し取る意味を理解し、丁寧に書くことができる (イ)</p> <p>字例を参考に生かしながら、創造的な書表現をすることができる (ウ)</p> <p>試行錯誤を繰り返しながら、創造的な書表現をすることができる (ウ)</p>

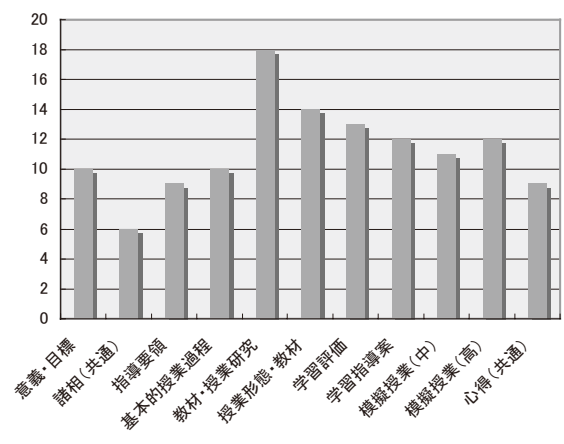
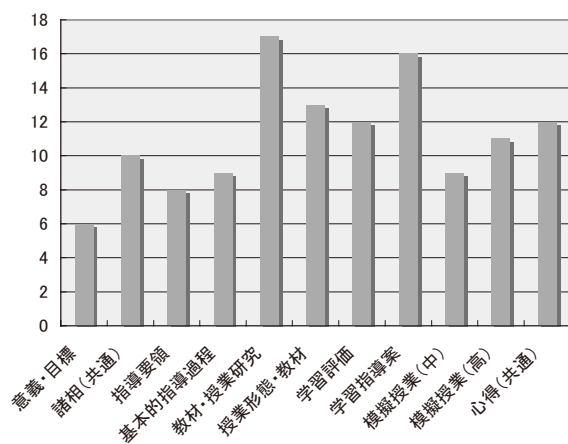
終 局 (10分)	<p>トレーシングペーパーをプリントに貼り込む 書いた成果の中から、意図と表現がもっとも近づいたものを1枚選ぶ</p> <p>プリントに感想を書き込む 自己の変容を意識する</p> <p>次時の予告を聞く 片付けをする</p>	<p>丁寧に貼るよう促す</p> <p>意図とそのため工夫を振り返り、表現との結びつきがもっとも強い作品を選ぶよう働きかける</p> <p>丁寧に文字で書き込むよう促す 本時の学習を振り返るよう促す</p> <p>次時の予告をする 協力して片付けるよう促す</p>	<p>本時の目標を踏まえ、ことばを表現することの良さを理解している (エ)</p> <p>本時の学習を振り返り、自己の変容を意識することができている (ア)</p>
-----------------	---	--	--

学習指導案は、生徒（学習者）の学習活動とそれに対する教師（指導者）の指導・支援を丹念に追う形で書くことを心がけ、授業観察をした教育実習生にも、学習指導案と実際の学習活動や学習指導がどう関連しているのかを追いながら観察することを求めた。また、学習指導要領の移行期間に入っているのも当然といえば当然であるが、評価規準も新しいものを使い、教育実習生にもその意識を伝えることとした。

公開授業の後、研究協議を行った。細かな指導内容についての質問等はなかったが、実際の授業を体験することができて良かったという感想の他に、学習目標と学習評価の関係についての質問が出るなど、事前指導での取組から発せられたものと考えられ評価できると考える。

6. 事前指導を振り返って —アンケート結果と分析を通して考える—

事後指導の一環として、事前指導についてアンケート調査を行っている。下のグラフは、どの講義が役だったかを聞いたもので、左が去年のもの、右が今年のものである。サンプル数は去年が24、今年が25となっている。去年はテキストなし、今年はテキストありであったが、テキストの有無はこのアンケートの結果には反映されていない。いずれも、教材・授業研究が最も多いことは教育実習生の意識のありかとして注目すべきだと思うが、極端に低い数値を示すものはなかった。



学習指導案については、思ったほど数値が伸びていないが、学習指導案の必要性や意義などを取り扱ったものより、実際に模擬授業等を行うに際して学習指導案を書く時に様々なことを考え始めるということが、自由記述の中からは読み取れる。

また、より実践的に行おうということで力点をおいた模擬授業であったが、回答を見ると大きく二分されていることに気づく。つまり、役に立ったと考えている者と、役に立たなかったと考えている者に分かれているのである。回答を引用する。

<役に立ったという回答>

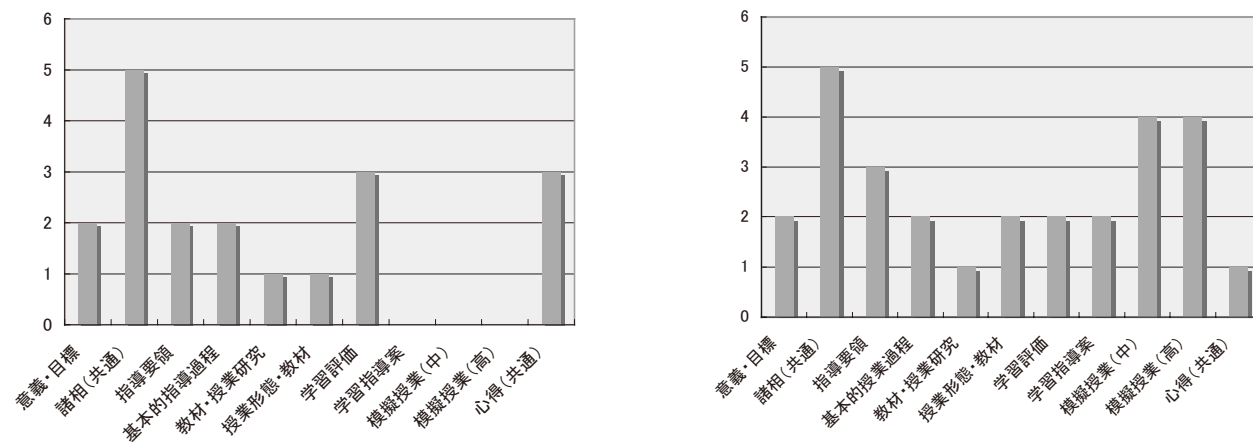
- ・模擬授業をしてみて、授業についての批評を聞いたことが役に立った。

<役に立たなかったという回答>

- ・グループで行うことで、やる人、やらない人が出てくるし、模擬授業で計画したそのままの授業計画を実習で行う学生もいて、ちょっと残念でした。
- ・模擬授業の緊張感が足りなかったのが、残念です。

最も役に立った授業と反対に役に立たなかった授業も聞いているのだが、いずれもが3名ずつ模擬授業を挙げている。模擬授業を行うには、いかに緊張感というか臨場感を実感できるかが大きな分かれ目となるのであろうと思う。本番の教育実習を意識して考えられた者はプラスに捉えているが、そうでない者はマイナスに捉えているのではないだろうか。臨場感の有無は、もちろん生徒の存在の有無なのであるが、生徒をその場に來させることはできない。それに代わる、より実感を伴って感じられる場面設定を考えていく必要がある。

下のグラフは、役に立たなかった授業を複数回答で聞いたもので、左が今年のもの、右が今年のものである。



母集団が異なるので、早計な判断はできないが、総数が増えていること、既出ではあるが、特に模擬授業にその回答があることを重く受け止めなくてはならない。昨年は、個人を指名して立案させた模擬授業案が、今年はグループで検討させたことも一因かも知れない。重ねて、役立つ模擬授業の実施の難しさを感じるとともに、今後に向けて検討を重ねていく必要性を強く感じた。

7. 教育実習で変わったこと —事後指導レポートから読み取る—

事後指導において、教育実習を経ての自己変容をレポートとして課している。まず、タイトルに注目したい。教育実習生として感じられた自己変容を記すレポートとして、そのタイトルは自由に付けるよう指示した。「教育実習から学んだこと」といったタイトルもあったが、「生徒が主体となる授業」「楽しんで学べる授業」「一期一会の存在」「芸術教育と書道」といったタイトルも目についた。

記述の内容を見てみよう（傍線は筆者）。

自分は仮名の授業を担当したが、仮名という現在あまり触れる機会のない分野なので、どのような授業展開で進めていくかとても悩んだ。実習の始まるまでに、教科書や指導書を見ながら、簡単に計画を立てて、初回の授業ではその計画を基盤とし、授業を組み立て実践したのだが、何か物足りない気がした。

その何かというのは、次の指導案を作成し、先生に見て頂いたときに分かったような気がする。その時、仮名の学習を通して生徒達に何を伝えたいのかという話をしてくださったと記憶している。つまり、仮名の学習を通して学んでほしいことは、技術面だけではなく、(中略)その学習を行うには鑑賞学習が必要で、教員の解説だけでは生徒は飽きてしまう。そうならないためにも、生徒の立場に立って、楽しく学習できる授業を組み立てていこうと思った。

実際にその授業を行って感想を書いてももらったのだが、「日本人の美意識が感じられた」とか「継色紙の見方が変わった」といった感想を見られ、生徒達に授業のテーマが伝わったようで嬉しかった。(後略)

こうした記述を追うと、確かに教育実習生の変容や成長が感じられる。悩み、実践し、物足りなさを感じ、指導を経て気づき、工夫し、新たな実践を行い、生徒の変容を感じ取り、自らの成長を認識する。そして、あらたな学習指導の改善に向かう。このような過程は、教育実習を通じて多く見られる現象だ。しかし、裏を返せば、この実習生は、事前指導の段階では、こうしたサイクルに気づいていないか、気づいていても実感が伴って認識されていないということだろう。ほとんどの教育実習生が、実習を通じて自らの変容を感じ取り、事前指導で指導されたことはこういうことであると、実習そのものが終わった段階で気づくと言って良い。

8. 事前事後テキストに対する学生の評価とその分析

では、教育実習生にとって事前事後指導のテキストはどのように映ったのであろうか。①使用してみたの感想、②テキストの必要性、③テキストの改善点の3点を自由記述にて回答してもらった。

①・間があり、それに答えていく形式は読みやすい。

- ・知りたい項目が分かりやすい。「生徒主体」ということが印象に残り、実習でも意識できた。
- ・指導案を考える際、どういった活動を盛り込んでいくのかを考えるのに役立った。
- ・実習生の不安な点についても触れられているので、読んでおくことで少し安心できた。
- ・使いやすいし、便利だった。書道に関するだけでなく、実習にあたっての心遣いも記載され良かった。
- ・書道の教員を目指す人に限定した参考書はほとんどないので助かりました。
- ・教育実習についての大まかな流れをこれで学べて良かったです。
- ・実践編で不安に思っていた質問もあり、不安が少し軽減された。

②・悩んだときなど指導法についての記述が参考になった。指導案は参考になった。

- ・経験のある先生の考えは参考になる。
- ・実習の準備や指導案作成の方法を具体的に知ることができた。
- ・冊子を読むことで安心できるので、必要性はあると思う。
- ・この本と指導要領、教科書を持参すればある程度のことには対応でき、とても役だった。
- ・より現場に近い目線での教材である。特に指導案作成時によく分かるよう実践的な内容だった。
- ・学習指導要領や指導案の例も載っていて、薄い一冊の本になっているので読みやすい。

③・指導案の数がもう少し多いと良い。

- ・図や絵があるとさらに分かりやすい。
- ・写真などを取り入れて実際の雰囲気や具体性が伝わると良い。
- ・実践編をより充実してほしい。実習生にとっての主な不安は、生身の人間に授業をすることだから。
- ・改善点ではないが、実習後に目を通すと「こういうことだったのか」と理解できた。

- ・特に大事と思われるところを、太字にしてもらえると助かります。
- ・鑑賞教育の意義や、生徒はどういう視点で作品を見るのか等の項目があると良い。

教育実習生の評価は概ね好意的であったと思われる。事前事後指導のテキストを作成することの最も大きな目的は、漠然とした不安を取り除き、実習までに何をすべきか、実習を行うにあたって配慮すべきことは何かを意識させ、行動に移させることであった。そういった面から見れば、一定の成果があったと考えられるかも知れない。特に、不安の解消や、実際に学習指導案を作成する過程においては参考になったという回答は複数寄せられた。実際に教育実習期間に見た学習指導案は、少なくとも形式の上では一定の姿を見せていたし、基本的な部分は押さえられていた。しかし、傍線を引いた回答のように、「実習後に目を通すと」ということが、実習前に分かり、意識して実習に臨むことができるのが本来であろう。テキストに書かれていた内容と、実際の学習指導の場面が完全に一致して捉えられるということはもちろんないわけであるが、よりイメージを明確なものにし、より実感の伴った事前指導を考えることが求められている。

9. おわりに —まとめにかえて—

2年間にわたるこのプロジェクトは、表題にもあるとおり、大学学部での書写書道教員の養成プログラムを開発することであった。そのために、基礎実習とその事前事後指導を見つめ、改善することを端緒とした。1年目でテキストの開発を進め、2年目でそれを使いながら、検証と改善を同時に進めようとした。現在、テキストの改訂版を作成中である。

しかし、残念ながら、教員養成プログラムを考えるまで研究は進んでいない。事前事後指導の問題点とその改善の方向性は見えてきたものの、その実施、あるいはそれ以前にある教科専門や書道科教育法、基礎実習後に設定されている書道科教育学演習や応用実習、今後導入が検討される早期の観察実習や4年次の教育実践演習等をトータルに視野に入れ、考えていかななくてはならないだろう。学部を卒業して、即戦力として現場に立てる教員の育成が急務であることは言をまたない。知識や技能を獲得しているだけでなく、実際に授業を進めていく力を持った教員の養成を、今後とも考えていきたい。